

## 木簡に記述された海藻 —7世紀～8世紀における海藻利用—

富塚朋子・宮田昌彦

千葉県立中央博物館分館海の博物館 (〒299-5242 千葉県勝浦市吉尾123)

Tomoko Tomizuka, Masahiko Miyata: Seaweeds on Wooden Tablets, with Special Reference to Five Ancient Sites in the Asuka-Nara era .  
Jpn. J. Phycol. (Sôru) 59: 145-153, November 10, 2011

There were 222 wooden tablets with descriptions on seaweeds in 46,490 items, from *Heijo Palace Site*, *Fujiwara Palace Site*, *Prince Nagaya's Residence Site*, *Second Street Site* and *Nagaoka Palace Site* in Asuka-Nara era (694-794). The 115 wooden tablets of them were Nifuda attached to dry seaweeds transported from the habitats as taxes (*Cho*, *ChunanSakumotsu*, *Nie*), and had 33 ancient seaweeds names. The seaweeds names were given by Manyogana, early Japanese syllabary using Chinese character to present ancient Japanese sounds as Yamatokotoba. The 33 ancient seaweeds may be taxonomically Rhodophyta (*Porphyra pseudolinearis*, *Gloiopeltis furcata*, *Porphyra* spp., *Gloiopeltis* spp., *Gelidium* spp., *Ceramium* spp., *Chondrus* spp.), Phaeophyta (*Undaria pinnatifida*, *Undaria undarioides*, *Ecklonia stolonifera*, *Eisenia bicyclis*, *Ecklonia cava*, *Sargassum fusiforme*, *Undaria* spp., *Ecklonia* spp., *Saccharina* spp., *Sargassum* spp., *Nemacystus* spp.) and Chlorophyta (*Codium* spp., *Ulva* spp.), in comparing with authoritative herbal literatures and taxonomical papers at the present. The 24 actual wooden tablets with ancient seaweeds names were presented as photographs.

*Key Index Words:* ancient seaweed name, Fujiwara Palace Site, Heijo Palace Site, Nagaoka Palace Site, the Nara era, Manyogana, Nifuda, Prince Nagaya's Residence Site, Second Street Site, tax, wooden tablet

Coastal Branch of Natural History Museum and Institute, Chiba, 123 Yoshio, Katsuura-shi, Chiba, 299-5242, Japan  
E-mail: tomizuka@shiraishi-law.jp

### 緒言

縄文時代中期の「中里貝塚」(東京都北区)や古墳時代から平安時代の「松崎遺跡」(愛知県知多半島)などの遺跡調査からは、海藻(Seaweed)や海草(海産種子植物)(Seagrass)に付着する葉上性微小貝類や珪藻などの微化石が土器などとともに発掘され、縄文人らが食糧や製塩の道具として海藻や海草を利用したことを示唆する(黒住1999, 森1991, 加納2001)。しかし、縄文から弥生時代の猪目洞窟遺跡(鳥根県)、竜河洞遺跡(高知県)、亀ヶ岡遺跡(青森県)から発掘されたとされる海藻の証拠資料は不明であり、縄文人・弥生人が利用し、絶対年代の測定が可能な乾物や化石としての海藻や海草の証拠資料は出土していない。

一方、「万葉集」,「風土記」,「続紀」,「養老令」,「記紀」などの調査において、奈良時代から平安時代(8世紀～10世紀)の人々と藻類とのかかわりが推定できる(関根1969, 秋本1998)。そこで、「倭名類聚鈔」などの辞書や法典等の文献による比較検証が可能な奈良時代の人々の海藻の利用形態と当時の社会における海藻の役割を推定する目的で7世紀～8世紀において役所内の連絡, 日常事務の帳票, 荷札として使われた木簡を調査した。特に、海藻は納税品として産地から都に運ばれていたことから(田口1900), 行政府の中枢機関が置かれた平城京など当時の都の遺跡から出土した平城京跡出土木簡(藤原京跡出土木簡(694～710), 平城宮木簡(710～784), 長屋王家木簡(710～717), 二条大路木簡(735～736), 長岡京跡出土木簡(784～794))に注目し, 奈良文化財研究所の木簡史料46,490点を調べた。

### 材料と方法

#### 木簡

木簡とは木の札に文字が書かれたもので、遺跡から出土する墨書土器(1～2文字の記述)などと比べて文字情報が多い。木簡は税物として海藻の乾物を送った本貫地(産地)の地方行政機関である国郡里の司が記述したものであり(館野1998), その内容は正確な情報とみることができる。また、木簡が書かれた本貫地の国郡里(郷)名, 送った人名, 物, 年月日等が決まった様式で記述してあるために釈読し易く, 当時の都と地域社会における物の流れと地域の生育種を推定できる。

木簡は形態と記述内容と用途によって文書木簡(短冊状の長方形で主に公的文書を記述), 付札木簡(物品の名前を記述), その他の木簡(落書き, 習書や呪符などの記述)に分類される(館野1998)。さらに付札木簡は紐をくりつけるために上下両端か, 上端にのみ切り込みを入れ, 荷の俵や縛った縄に差し込むために下端は尖らせたもので, 荷を送付・進上する際に付けた荷札とする荷札木簡と, 保管収納する荷の内容を明示する狭義の付札木簡(以後は, 狭義の意に用いる)に区別される。荷札木簡は, 調・中男作物・贄などの貢進物(税)に付けた荷札で, 納税した人物の国郡里(郷)名, 人名, 送付した産物の税目, 税物, 貢進量, 年月日を記述した。ときに幾つかの項目を省略する場合もあった。

#### 木簡に記述された海藻名の推定

木簡に記述された古代の海藻名(漢語)に現在の属名・種名を推定する作業は, 以下のような5つの過程を経ておこなった。



表1 木簡史料を記述した文献。

編者・発行	文献名	発行年
木簡学会	木簡研究	1979～2009
奈良国立文化財研究所	木簡研究集会報告要旨	1975
奈良県教育委員会	藤原宮跡出土木簡概要	1963
奈良県立橿原考古学研究所	奈良県遺跡調査概報	1976～2009
奈良県教育委員会	藤原宮（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊）	1969
奈良県立橿原考古学研究所	飛鳥京跡昭和51年度調査概報	1977
奈良県立橿原考古学研究所	高市郡明日香村飛鳥京跡発掘調査概報	2002
飛鳥保存財団	明日香風17号	1998
奈良国立文化財研究所	藤原宮木簡	1978～1981
奈良文化財研究所	飛鳥藤原京木簡	2009
奈良国立文化財研究所	飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報	1973～2008
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所年報	1958～2009
奈良文化財研究所	奈良文化財研究所紀要	1958～2009
奈良国立文化財研究所	平城宮木簡	2004
奈良（国立）文化財研究所	平城京木簡	1995～2008
奈良国立文化財研究所	平城宮発掘調査出土木簡概報	1963～2009
奈良文化財研究所	評制下荷札木簡集成	2006
西隆寺跡調査委員会	西隆寺発掘調査報告	1993
奈良県教育委員会	東大寺防災施設工事・発掘調査報告書 発掘調査篇	2000
奈良県教育委員会事務局		
奈良県文化財保存事務所	国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書	1972
木簡学会	日本古代木簡選	1990
松嶋順正	正倉院宝物銘文集成	1978
向日市教育委員会		
(財)向日市埋蔵文化財センター	長岡京木簡	1984
(財)京都市埋蔵文化財研究所	長岡京左京出土木簡1	1997
(財)向日市埋蔵文化財センター	長岡京跡ほか (向日市埋蔵文化財調査報告書第64集(第1分冊))	2005

物品の調整をはかるため、市で交易した品目の数量を整えて納入したことを示している。このように、荷札木簡に記述された税の種類は本貫地、量などとともに海藻名又は種類名を推定するために参考となる。

## 結果

平城京跡出土木簡の46,490点を調査した結果(表1)、海藻の記述のある木簡222点を確認した。そのうち、文書木簡は20点(うち習書2点、伝票1点)、付札木簡は36点、税として都へ送られた海藻の乾物に付けられた荷札木簡は115点、読み解けないものは51点であった。調査した海藻の名称は33点であり、属まで推定できたものが12属、そのうち種まで推定できたのが8種であった。

税(調、中男作物、贄)として荷札木簡を付けた海藻を送った国(本貫地)

木簡史料から海藻を納税した本貫地と木簡数は、北海道を除く日本列島6地方、19国から108点であった(以下)(図1)。

- (1) 近畿地方：志摩国(三重県東部)20点、紀伊国(和歌山県と三重県南部)1点
- (2) 中国地方(日本海側)：長門国(山口県西部)2点、石見国(島根県西部)1点、出雲国(島根県東部)6点、隠岐国(島根県隠岐島)44点、伯耆国(鳥取県中部及び西部)2点、因幡国(鳥取県東部)8点、但馬国(兵庫県北部)4点、丹後

国(京都府北部)2点、丹波国(京都府中部と兵庫県北東部)1点

- (3) 北陸地方：若狭国(福井県南部)3点、佐渡国(新潟県佐渡島)1点
- (4) 四国地方(太平洋側)：伊予国(愛媛県)2点、阿波国(徳島県)3点
- (5) 中部地方：三河国(愛知県東部)4点
- (6) 関東地方：上総国(千葉県中部)1点、下総国(千葉県北部、埼玉県東辺、東京都東辺(隅田川東岸)、茨城県南西部)1点、常陸国(関東地方東北端部)2点

木簡に記述された古代の海藻名

出土木簡24点を示し(図2)、記述内容をまとめた(表2、表3)。そして、木簡に記述された海藻名の現在の分類学上の種名(分類群)を同定した(表3)。以下に、その同定に至る経緯を述べる。括弧内は倭名抄による読みを表す。

### (1) 紫菜(無良佐木乃里)(ムラサキノリ)

松井本と前田本に「和名 牟良佐岐乃利」とある。倭名抄で「俗用 紫苔」とあり、「紫苔」の項に「和名 須無能里」とあって、飲食に用いるとある。出雲国風土記(733)(埴1984)に記述のある島根県平田市十六島の紫菜島神社の例祭には「紫菜」が献上されてきたが、献上された実物を調べたところウップルイノリ(十六

島海苔)であった。延喜式・卷廿四主計上(各地で納める租庸調で納める物の単位を定めた項)に、調の品目で紫菜を納めた国は出雲国, 石見国, 隠岐国, 志摩国とある。紫菜はこの地方の特産である。

江戸時代後期の倭名類従抄の注釈書「箋注倭名類従抄」の「神仙菜」の解説に「紫菜」と同義で「阿未乃利 俗用 甘苔」とあり(澤瀉 1943), 宮下(2003)は「神仙菜は紫菜の雅号である」としていることから、紫菜はウップルイノリを含むアマノリ属の種類と推

表2 木簡の本文と形状, 出典文献。

番号	海藻名	文献を基に推定した種名・種類とその学名	種類	本文	地名・人名・年号(西暦)	長さ, 幅, 厚さ(mm)	形態	木簡が出土した遺跡名(所在地)	釈文の出典
1	紫菜	ウップルイノリ <i>Porphyra pseudolinearis</i> 又はアマノリ属 <i>Porphyra</i> spp.	付札	紫菜〇上		130,23,3	031	平城宮(奈良県奈良市佐紀町)	平城宮1-463(城1-11上(162))
2	紫菜		荷札	出雲国交易紫菜三斤「太」	出雲国	(133),22,6	031	平城宮	平城宮2-2836(城3-9下(163))
3	紫菜		荷札	隠伎国智夫部〇/由良郷津守部足人/紫菜二斤	隠岐国・津守部足人	154,25,2	031	平城京左京三条二坊八坪 二条大路濠状遺構(南)(二条大路南一丁目)	城22-35下(366)
4	紫菜		荷札	隠伎国/海部部作佐郷/大井里海部小付〇調紫菜二斤	隠岐国・海部小付	120,21,3	031	平城京左京三条二坊八坪 二条大路濠状遺構(南)(二条大路南一丁目)	木研5-12頁-1(30) (城16-10上(72)・日本古代木簡選)
5	心太	テングサ属 <i>Gelidium</i> spp.	付札	心太十斤		119,25,5	032	平城京左京三条二坊一・二・七・八坪 長屋王邸(二条大路南一丁目)	城25-22下(284)
6	伊祇須	イギス属 <i>Ceramium</i> spp.	付札	和具郷伊祇須	志摩国	(66),18,2	019	平城京左京二条二坊五坪 二条大路濠状遺構(北)(法華寺町)	城29-31上(347)
7	凝海菜	テングサ属 及びイギス属	荷札	隠伎国智夫部〇/美多郷石部員万呂/凝海菜六斤	隠岐国・石部員万呂	(142),23,4	031	平城京左京三条二坊八坪 二条大路濠状遺構(南)	城22-35下(368)
8	小擬	イギス属	荷札	△参河国賀飯郡藤東郷中男作物小擬六斤・〇天平十八年九月廿日	参河国・746	298,35,6	032	平城宮・平城宮1-356	日本古代木簡選・城1-9下(131)
9	鹿角菜	フクロフノリ <i>Gloiopeltis furcata</i> 又は ツノマタ属 <i>Chondrus</i> spp.	付札	鹿角菜一籠	参河国・746	185,17,4	011	平城宮・木研7-121頁-(37)	(平城宮3-3073・城5-4上(14))
10	角俣	ツノマタ属	付札	角俣		183,22,5	051	平城京左京二条二坊五坪 二条大路濠状遺構(北)	平城京3-4980(城24-32上(352))
11	乃利・布乃利・海藻・細米・弥留・伊支須・廣米	アマノリ属・フノリ属・ワカメ属 <i>Undaria</i> spp.・(不明)・ミル属 <i>Codium</i> spp.・イギス属・ワカメ属又はヒロメ <i>Undaria undarioides</i>	付札	乃利一古〇布乃利一古〇海藻一古〇細米二束〇弥留一古〇伊支須一古〇廣米一束〇右七籠		385,44,5	011	平城宮東院地区(法華寺町)	城12-8下(25)
12	若海藻	ワカメ属	荷札	下総国海上郡酢水浦若海藻〇御費太伍斤中	下総国	202,25,6	032	平城宮	平城宮1-400(日本古代木簡選・城1-6下(67))
13	海藻	ワカメ属	文書	△〇所給物〇/海藻二連〇盤四升/伊〇(支カ)須一斗〇塩四升〇右四種〇交後 藤原朝・716 藤原朝・〇潤十一月六日	藤原朝・716	(265),28,4	019	平城京左京三条二坊一・二・七・八坪 長屋王邸	平城京2-1784 (城21-27下(276))
14	群海藻	ワカメ属	荷札	長門国豊浦郡都濃嶋所出群海藻天平十八年三月廿九日	長門国・746	273,36,7	031	平城宮	平城宮1-401(城1-11上(157))
15	海藻	ワカメ属	荷札	因幡国気多郡勝見郷中男神部直勝見磨作物海藻大御費志籠六斤/太〇/神護景雲四年	因幡国・神部直勝見磨	408,20,5	011	平城宮	木研9-118頁-(44)(平城宮4-4668・城4-20上(403))
16	軍布	ツルアラメ <i>Ecklonia stolonifera</i>	荷札	水江軍布十六斤		83,26,4	031	平城宮	木研7-121頁-(22)(平城宮3-2918・城5-8下(96))
17	海藻根	ワカメ		海藻根		(76),(16),5	081	平城宮	平城宮1-15
18	鹿角菜	ヒジキ <i>Sargassum fusiformis</i>	付札	生鹿角菜口十口		(146),34,5	033	平城宮内裏東方東大溝地区(奈良市佐紀町)	城19-27下(300)
19	撫滑海藻	アラメ <i>Eisenia bicyclis</i> 又は カジメ <i>Ecklonia cava</i>	付札	撫滑海藻		162,18,2	051	平城京左京三条二坊八坪 二条大路濠状遺構(南)	城22-41上(459)
20	滑海藻	アラメ又はカジメ	付札	滑海藻綱鏡九烈五條		117,15,3	051	平城京左京三条二坊八坪 二条大路濠状遺構(南)	城22-40下(451)
21	皆流	ミル属	文書	皆流廿古小大三古		219,42,2	011	平城宮	平城宮1-213(城1-5上(38))
22	海松	ミル属	付札	堅魚一籠/海松一籠		188,44,5	032	平城京左京三条二坊八坪 二条大路濠状遺構(南)	城31-33下(511)
23	海松	ミル属	荷札	志摩国嶋郡舟越里戸主嶋直津得戸口〇/同文師調海松六斤〇/和銅七年四月十日〇/〇〇〇〇	志摩国・嶋直津得・嶋直文師・714	307,30,2	033	平城京左京三条二坊一・二・七・八坪 長屋王邸	城25-28下(城21-30上(312))
24	海松	ミル属	荷札	志摩国志摩郡道後里戸主証直猪手戸口同身麻呂調海松六斤	志摩国・証直猪手・証直身麻呂	301,23,4	031	平城宮東院地区(奈良市法華寺町)	城12-8上(18)

凡例

- 番号1~24の木簡について、番号・木簡に記述された海藻名・和名・学名・木簡の種類・木簡に記述された本文(〇:空白,「」:異筆か追筆, /:割書(の始まりと終り), △:表裏の区別, □:字数が確認できる欠損文字, カ:注で疑問の残るもの, []:本文に置き換わるべき文字, \:改行を示す。)
- 木簡に記述された地名・人名・年号(西暦)・木簡の長さ, 幅, 厚さ(mm)・木簡の現在の形態を示す番号(031:長方形の材の両端の左右に切り込みを入れたもの, 032:長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの, 051:長方形の材の一端を尖らせたもの, 011:長方形の材のもの, 019:一端が方頭で, 他端が尖られたもの, 081:原形の判明しないもの, 033:長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ他端を尖らせたもの)
- 木簡が出土した遺跡名(所在地)・木簡の釈文が報告されている出典を示す(平城宮1~6:奈良国立文化財研究所「平城宮木簡」, 城4~30:奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査出土木簡概報」, 木研1~30:木簡学会「木簡研究」, 日本古代木簡選:木簡学会「日本古代木簡選」, 平城京1~3:奈良(国立)文化財研究所「平城京木簡」)

表3 木簡に記述された海藻と用途。

番号	海藻名	文献をもとに推定した種名・種類	学名	*点数	*種類とその点数	*税目とその点数
(1)	紫菜	紅藻ウップルイノリを含むアマノリ属	<i>Porphyra pseudolinearis</i> , <i>Porphyra</i> spp.	7点	荷札3点, 付札2点	調1点, 交易1点
(2)	乃利	紅藻アマノリ属	<i>Porphyra</i> spp.	6点	荷札5点	調3点
(3)	赤乃利	紅藻フクロフノリ	<i>Gloiopeltis furcata</i>	1点	付札1点	調1点
(4)	布乃利	紅藻フノリ属	<i>Gloiopeltis</i> spp.	3点	荷札1点, 付札1点	
(5)	心太	紅藻テングサ属など	<i>Gelidium</i> spp.	7点	付札1点, 文書1点	
(6)	伊支須	紅藻イギス属	<i>Ceramium</i> spp.	9点	荷札3点, 付札3点, 文書2点	
(7)	伊祇須	紅藻イギス属	<i>Ceramium</i> spp.	2点	荷札1点, 付札1点	
(8)	小凝	紅藻イギス属	<i>Ceramium</i> spp.	1点	荷札1点	調1点
(9)	小擬	紅藻イギス属	<i>Ceramium</i> spp.	1点	荷札1点	中男作物1点
(10)	凝海藻	紅藻テングサ属, イギス属	<i>Gelidium</i> spp., <i>Ceramium</i> spp.	1点	荷札1点	
(11)	鹿角菜	紅藻フクロフノリ又はツノマタ属を含む角状の分枝をもつ海藻	<i>Gloiopeltis furcata</i> , <i>Chondrus</i> spp.	1点	付札1点	
(12)	角俣	紅藻ツノマタ属	<i>Chondrus</i> spp.	2点	付札2点	
(13)	海藻	褐藻ワカメ属	<i>Undaria</i> spp. (ワカメ <i>Undaria pinnatifida</i> など)	81点	荷札55点, 付札3点, 文書12点, 伝票1点, 札55点	調23点, 中男作物14点, 費7点
(14)	若海藻	褐藻ワカメ属	<i>Undaria</i> spp.	19点	荷札1+4点, 付札3点,	調1点, 費8点
(15)	脚海藻	褐藻ワカメ属	<i>Undaria</i> spp.	1点	荷札1点	
(16)	海藻根	褐藻ワカメの胞子葉部	<i>Undaria pinnatifida</i>	4点	荷札1点, 付札1点, 文書1点	
(17)	細米	幅の狭い葉状の海藻		1点		
(18)	廣米	幅の広い葉状の海藻又はヒロメ	<i>Undaria undarioides</i>	2点		
(19)	軍布	褐藻ツルアラメ	<i>Ecklonia stolonifera</i>	36点	荷札18点, 付札4点	調1点
(20)	滑海藻	褐藻アラメ又はカジメ	<i>Eisenia bicyclis</i>	10点	荷札1点, 付札3点, 文書2点, 習書1点	
(21)	未滑海藻	褐藻カジメ又はアラメの加工したもの	<i>Ecklonia cava</i>	1点	付札1点	
(22)	撫滑海藻	褐藻アラメ又はカジメ	<i>Eisenia bicyclis</i>	3点	付札3点	
(23)	昆布	褐藻コンブ属又はカジメ属, ワカメ属	<i>Saccharina</i> spp., <i>Ecklonia</i> spp., <i>Undaria</i> spp.	2点	文書・習書1点	
(24)	搦海藻	褐藻アラメ又はカジメ	<i>Eisenia bicyclis</i> , <i>Ecklonia cava</i>	1点	文書1点	
(25)	名乃利毛	褐藻ホンダワラ属	<i>Sargassum</i> spp.	1点	荷札1点	
(26)	奈乃利毛	褐藻ホンダワラ属	<i>Sargassum</i> spp.	2点	付札1点	
(27)	名乗菜	褐藻ホンダワラ属	<i>Sargassum</i> spp.	1点	荷札1点	
(28)	鹿尾菜	褐藻ヒジキ	<i>Sargassum fusiforme</i>	1点	付札1点	
(29)	毛豆久	褐藻モズク属	<i>Nemacystus</i> spp.	1点	荷札1点	
(30)	海松	緑藻ミル属	<i>Codium</i> spp.	11点	荷札6点, 付札4点	調3点
(31)	皆流	緑藻ミル属	<i>Codium</i> spp.	1点	文書1点	
(32)	弥留	緑藻ミル属	<i>Codium</i> spp.	1点		
(33)	青乃利	緑藻アオノリ属	<i>Ulva</i> spp.	1点	文書1点	

\* 同じ海藻名を記述した木簡の点数, 使用目的による木簡の種類とその点数, 記述された海藻の税目とその点数

定した(図2-1~4)。

中国古代の料理書「齊民要術・第79章」(532~549頃成立)(田中ほか1997)の記述などから, 飛鳥・奈良時代に隋, 唐から律令制度に関する情報とともに, 紫菜の用途が輸入された可能性がある。中国の文献でも紫菜属は *Porphyra* (アマノリ属) である(曾2009)。

## (2) 乃利

松井本, 前田本の「紫菜」と高松本の「紫苔」をともに「和名 牟良佐枝乃利」(ムラサキノリ)と読ませ, 現存最古の本草書「本草和名」(918)の「紫苔」の記述に「和名 須牟乃利」(アマノリ)とある(与謝野1926)。アマノリ属の種類と推定した(図2-11)。

## (3) 赤乃利

赤乃利は文献には見当たらない。本貫地である三重県(志摩国)の漁業者はフクロフノリをアカノリと呼んできた。そこで, 「赤乃利」をフクロノリと推定した。

## (4) 布乃利

「海羅」を倭名鈔及び伊勢本, 天正本では「和名 不乃利」と読ませ, 松井本, 前田本, 高松本で「和名 不能利」とある。延喜式・巻第卅三大膳職式下に「鹿角菜」を「布乃利」と読ませ多くの産地があり, 広域分布種であることを示唆している。フノリ属と推定した(図2-11)。

## (5) 心太

倭名鈔の「大凝菜」の項に「凝海藻」とあり, 「俗用 心太」(古々呂布止)とある。煮ると抽出物が凝結して煮こごりができる海藻を総称して凝海藻と呼んだ可能性がある。「心太」は延喜式及び伊呂波字類抄にも俗名とある。室町時代の職業を紹介した「七十一番職人歌合絵巻」(16世紀初頭)に「心太うり」があり, 「心ぶと」「心てい」と表記がある(千葉県立中央博物館1997)。語源の転訛を記述した「南留別志」(1736)に「『こころてい』が『ところてん』となった」とある(日本随筆大成編集部1995)。心太はテングサ属など煮こごりができるトコロテンの原藻と推定した(図2-5)。

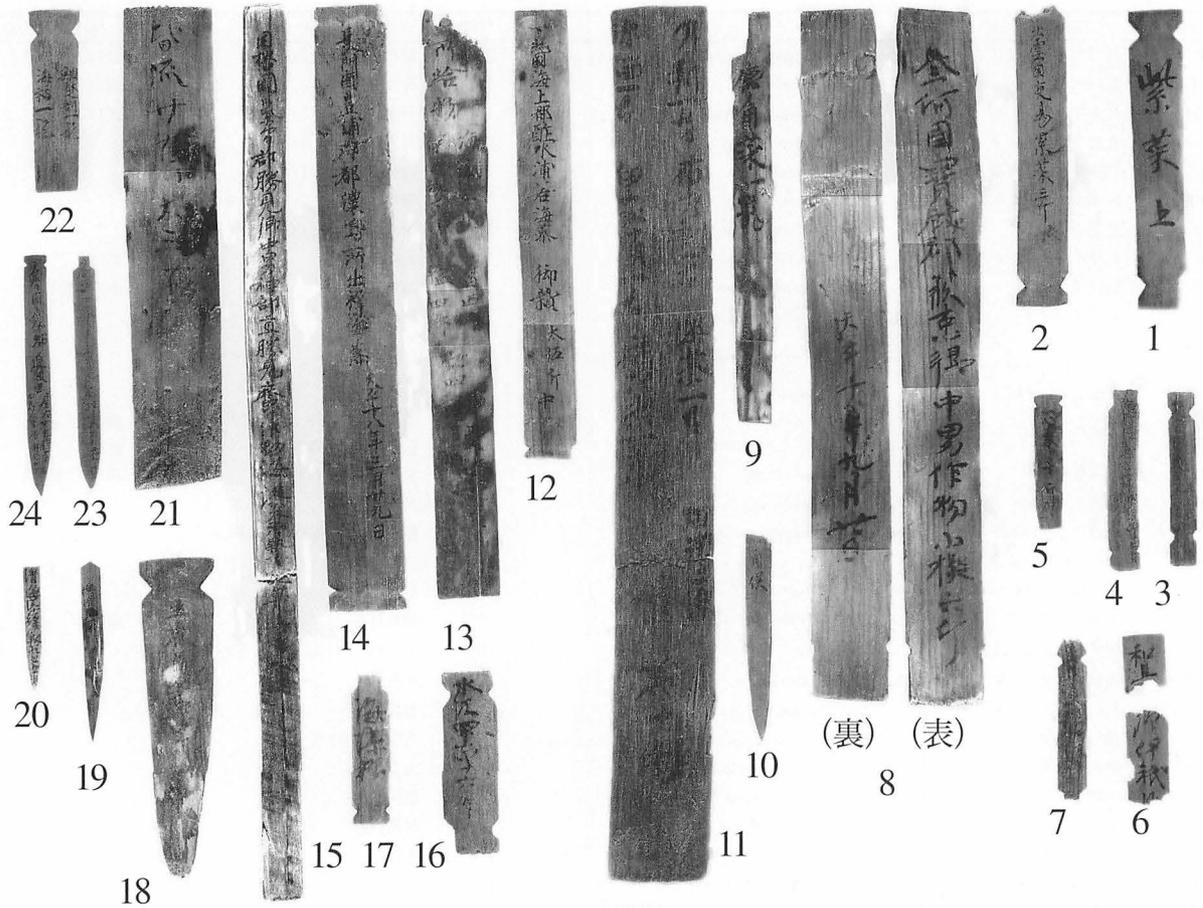


図2 藤原京跡，平城京跡，長屋王家跡，二条大路跡，長岡京跡から出土した古代の海藻名の記述のある木簡。

#### (6) 伊支須

倭名抄の「海髪」に「和名 以木須」とあり、松井本、前田本、高松本には「伊岐須」とある。また、延喜式は「海髪」に「以木須 云 小凝菜」とあり、小凝菜と同義語である。「凝」は固まるの意をもつ。地域の聞き取り調査から、本貫地に分布する海藻の呼び名として現在もあり、それが煮こごりができる小型の海藻のイギス属であることとこの海藻の分布と本貫地の分布が対応することからイギス属と推定した(図2-11)。

#### (7) 伊祇須

延喜式・巻第卅九正親司・内膳司に「伊祇須」がある。古代において、本義とは関係なく同音や字音に近い字を使用する通假字や同じ音の既存の漢字を代用する假借字が多用されていたので(吉岡 1886)、(6)の表記とともに「いぎす」と読む。(6)「伊支須」と同様にイギス属と推定した(図2-6)。

#### (8) 小凝

「小凝菜」の解説が倭名抄にあり、「菜」を簡略化したか欠落したものと考える。延喜式、伊呂波字類抄にも「小凝菜」とある。江戸中期の語学書「東雅」(1717)の中で「(佚書)「楊氏漢語抄」の記述に『イキスは小凝菜、コルモ(コルモハと同じで俗用ココロ

プト)は大凝菜で、フトは太い也』とあることから(大槻 1903)、大凝(藻体が大きく質感が硬いテングサ属)に対して、小凝は藻体が比較的小さく柔らかいイギス属と推定した。

#### (9) 小凝

小凝の別表記でありイギス属と推定した(図2-8)。

#### (10) 凝海藻

倭名抄の「大凝菜」の項に「凝海藻」とあり、「古留毛波 俗用心太 二字 云 古々布止」と読ませる。また、中国の字書に倣って作られた現存最古の漢和辞典「新撰字鏡」(892)に凝海藻の読み「伊支須」とある(京都大学文学部国語学国文学研究室 1979)。現行の漢名は粘性物質を抽出することができるエゴノリ属 *Campylaeophora* に「凝菜属」をあてている(曾 2009)。凝海藻は藻体を煮溶かしてトコロテン状に固まるテングサ属とイギス属などの海藻類と推定した(図2-7)。

#### (11) 鹿角菜(豆乃萬太)(ツノマタ)

フクロフノリは延喜式に「鹿角菜、布乃利」、倭名抄及び伊呂波字類抄に「海羅、布苔」の表記があり、また、ツノマタは延喜式に「角俣菜、鹿俣菜」、倭名抄及び伊呂波字類抄に「鹿角菜」と

ある。フクロフノリかつノマタ属と推定した(図2-9)。また、現行の漢語の表記は「鹿角菜属」をエゾインゲ属 *Silvetia* としている(曾2009)。

#### (12) 角俣

延喜式・第卅三大膳職下及び第廿四主計寮上に「角俣菜」とある。現行の漢語の表記は「角叉菜」をツノマタ属 *Chondrus* としている(曾2009)。ツノマタ属と推定した(図2-10)。

#### (13) 海藻(迹木米)(ニキメ)

倭名抄に「俗用 和布」とある。日本の食物全般を記した「本朝食鑑」(1695)で「和布」に「和加女」と訓みがある(島田1976)。江戸時代の本草書「大和本草」の「裙帯菜」の記述に「食物本草(中国明代1368～1644の本草書)載レ之、和名抄曰、ニギメ」とあり(貝原1709-1715)、現行の漢語の表記は、「裙帯菜属」をワカメ属 *Undaria* としている(曾2009)。ワカメ属と推定した(図2-11, 13, 15)。(16)を参照。

#### (14) 若海藻

「若い」「海藻」であり、ワカメの若い体と推定した(図2-11)。出始めの時期のもので柔らかく美味しい。したがって、元来天皇家に納める用途の「贄」の木簡の点数の割合が高いものと考えられる。(16)を参照。

#### (15) 稗海藻

延喜式で「稗海藻」、稚海藻、伊呂波字類抄で「稚海藻」があり、稗の音はチで、稚(幼い)で「若海藻」と同義であり(関根1969)、ワカメ属の若い体と推定した(図2-14)。

#### (16) 海藻根

「海藻」と記述の木簡は、隠岐国、阿波国、志摩国、因幡国、長門国、丹波国、丹後国、出雲国、若狭国、但馬国、伯耆国、石見国、紀伊国、伊予国からのものであり、「若海藻」と記述の木簡は、他に佐渡国、常陸国、下総国、上総国の産地名がある。他の海藻と比べて本貫地が多く広域の分布域をもつ海藻を示唆する。また、藻体の形態的な特徴と有用性部位という視点において、「根」は「孢子葉(生殖器官)」を示すと考える。孢子葉部を示す「海藻根」の記述があるなどワカメの部位が区別されていた(瀧川1961)。ワカメは当時、最も流通し多用された海藻であった。ワカメの孢子葉と推定した。(図2-17)。

#### (17) 細米

後述の(18)「廣米」の対照として幅の細いワカメの可能性もある。平安時代中期の長編物語「宇津保物語」(946～991に成立)に「おさめどのより ほそめ さとめ むらさいのりなどいだし(納殿より細布、さとめ(ふとめ)、紫海苔など出だし(嵯峨院)の行(くだり)があり(塚本1926)、海藻類であると考えられるが特定できない。総称で布状の海藻を「メ」と呼んだことから幅の狭い膜状海藻と推定した(図2-11)。

#### (18) 廣米

幅広の海藻と推定した。また、聞き取り調査からヒロメの可能性もある(図2-11)。

#### (19) 軍布

軍布は一般に「め」と訓ませワカメとする説があり(関根1969)、隠岐国を本貫地とする木簡に「軍布」と「海藻」の表記が重複する点について、「め」の表記が時間的流れの中で「軍布」から「海藻」に変化したものとあるが(俣野2004)、「軍」の仮名音は「クン」にあたり、「布」は仮名で「ホ」「フ」らである。したがって、軍布は「クンフ」で「n」の後が濁音化して「クンプ」となればコンブの発音となる。しかし、木簡で確認できる本貫地は隠岐国だけであり、寒流系に生育するコンブ属は当該地に分布しない。現在の中国の漢語ではカジメ属を昆布属 *Ecklonia* と表記しており(曾2009)、褐藻カジメ科の分布状況からツルアラメと推定した(図2-16)。

#### (20) 滑海藻(阿良女)(アラメ)

高松本に「和名 阿羅米」とあり、倭名抄及び延喜式、伊呂波字類抄に「俗用 荒布」とある。現在の呼び方と地域の聞き取り調査及び産地の分布状況からアラメ又はカジメと推定した(図2-20)。

#### (21) 未滑海藻(加知女)(カチメ)

カジメ又はアラメと推察できるが、倭名抄に「俗用 搗布搗者 搗未之義也」とあるので、種類を示す語ではなく、未は搗と同義語で搗いて粉末にするという意味からカジメ又はアラメを粉末に加工したものと推察した(関根1969)。

#### (22) 撫滑海藻

「皺のないアラメ」(瀧川1961)、「アラメをたたきほぐしたもの」(関根1969)とあるが、断定できない(図2-19)。(21)と(22)は海藻の種類ではなく海藻の加工品を示す可能性があるが分らない。

#### (23) 昆布(衣比須女・比呂米)(エヒスメ・ヒロメ)

昆布の表記のほか、延喜式・卷廿三民部下・卷卅三大膳下に「索昆布」、延喜式・卷卅三大膳下及び伊呂波字類抄に「衣比酒女」がある。現行の中国の漢語表記は、海带属 *Laminaria*(=*Saccharina* コンブ属)、昆布属 *Ecklonia* (カジメ属)とあり(曾2009)、カジメ属とも考えられる。海藻名に図を付した中国の文献「救荒本草」(1406頃)(朱、明)や「植物名實圖考」(1880頃)(呉、清)の図をみると、現在の寒流系に生育するコンブ属は「海带」であり、「昆布」はワカメかカジメの先端部に見える。したがって、漢語の海藻名と日本における海藻の実物とが逆転していたのではないかとされる(牧野1936)。しかるに日本では歴史的にみて「海带」の表記はない。古典にある植物名はその形態の記述は不十分であることから、その植物を正確に同定するには植物の分布の情報が必要である(北村1973)。

日本で「昆布」表記を文献で最古に確認できるのは「続日本紀」

(797)に「蝦夷須賀君古麻比留等言 先祖以来 貢献昆布 常採此地」(蝦夷の酋長・須賀君古麻比留が朝廷に先祖代々、この地で採集した昆布を貢献した)とある(経済雑誌社 1901)。蝦夷とは現在の北海道であるので、生育分布からコンブ属である。同様に、倭名鈔の「昆布」の読み「衣比須女」とあるのも衣比須は蝦夷に通じることからコンブ属である。寒流系のコンブ属と暖流系のカジメ属とは生育分布が異なる。当時、木簡を付けて輸送された、幾つかに裁断したコンブ属や不要な茎部を捨てて葉状部をまとめて乾燥したカジメ属やワカメ属を紐で括ったものは生育時の藻体の特徴はなく、同じ用途であれば同類のものと見なした可能性があり、カジメ属やワカメ属を紐で括ったものの総称として「昆布」と記述した可能性がある。

調査した木簡2点は「繩昆布」とあり紐で括られたものと考えられる。また、文書・習書木簡であり、産地表記がなく木簡からは種を推定することができない。コンブ属又はカジメ属、ワカメ属と推定した。

#### (24) 搗海藻

倭名鈔の「搗布」と同義語と考える。俳諧作法書「毛吹草」(1645)に「掛川 葛布 同 搗和布」とあり搗和布に「かじめ」のふりがながある(加藤 1978)。「本朝食鑑」(1695)に「搗布似ニ荒布一」(アラメに似る)とある(島田 1976)。アラメ又はカジメと推定した。

#### (25) 名乃利毛

(27)を参照。

#### (26) 奈乃利毛

(27)を参照。

#### (27) 名乗菜

倭名鈔の「莫鳴菜」に「和名 奈々里曾、神馬藻、奈乃里曾」とある。また、高松本に「和名 奈能利曾」とある。古事記(712)允恭記の「允恭十一年(412)(略)かれ、時の人、浜藻を号けて、奈能利曾毛(なのりそも)と謂ひき」が海藻名「なのりそ」の語源説話となっている(加藤ほか 1981)。「日本書紀通証」(1762)の訓義を発展、補充した「倭訓栞」(1898)に「ほだわら」は「古への『なのりそも』なりといへり」とある(谷川 1898)。ホンダワラ属と推定した。

#### (28) 鹿尾菜(比須木毛)(ヒスキモ)

松井本、前田本、高松本に「和名 比須岐毛」とある。「新撰字鏡」(892)は「和名 比須支」であり(京都大学文学部国語学国文学研究室 1979)。「本朝食鑑」(1695)に「訓ニ比須木毛、今称ニ比之木一也」(比須木毛は現在の比之木(ひじき))とある(島田 1976)。ヒジキと推定した(図 2-18)。

#### (29) 毛豆久

倭名鈔にある「水雲」に「和名 毛豆久」、松井本、前田本、高松本に「和名 毛都久」とあり、共に「もずく」と読み、モズク

属と推定した。

#### (30) 海松(美流)(ミル)

倭名鈔に形の説明として「松状如」とあり、現行の中国では松藻属 *Codium* とある(曾 2009)。ミル属と推定した(図 2-22~24)。

#### (31) 皆流

皆流は、(30)を参照。地方からの木簡のため通假字や假借字で名称が表記されたものと推定した(図 2-21)。

#### (32) 弥留

弥留は、(30)(31)を参照(図 2-11)。

#### (33) 青乃利

倭名鈔の「陟釐」に「和名 阿乎乃利」とあり、「俗用 青苔」とある。「新撰字鏡」(892)にある「陟釐」は「和名 青乃利」とあり(京都大学文学部国語学国文学研究室 1979)、アオノリ属と推定した。

なお、調査対象とした木簡に記述のある「加自米」(推定カジメ)、「塔志加自米」(推定カジメ、アラメ)、「意期」(推定オゴノリ)も海藻名である可能性がある(関根 2001)。しかし、これらの表記が古代の書物や後世の文献で確認できなかったため、本稿には収集しなかった。

### 考察

調査した荷札木簡及び狭義の付札木簡から読み取れる税の対象となった海藻の名称は33点であり、属まで推定できたものが12属、そのうち種まで推定できたのが8種であった。また、生長段階を示すと推定される名称が2点、藻体の部位を示す名称が1点あった。特にワカメは「若海藻」や「禪海藻」といった幼体期を示す名称や、「海藻根」(胞子葉部)という生殖器官の名称が確認でき、調査した本貫地の19國中、18国で見られた。ワカメは分布域が広く、低潮線付近から漸深帯上部の岩上に生育することから採取し易いこと、藻体が大型であること、そして、柔らかく美味しいことから、多用されてきたと推定する(関根 1969)。

凝海藻の「凝」は固まるの意であって、凝海藻は煮固めてトロテン状に料理する原藻である。さらに凝海藻を藻体の形と質から、大形の固いテングサ属を「大凝菜」、小形の柔らかいイギス属を「小凝菜」に分類しており、加工法とその原藻の種類が地方にまで認知されていたことが分かる。

隠岐国は、本貫地の確認できる荷札木簡・付札木簡の4割を占め、記述された海藻の種類も他国よりも多く、有用海藻の一大供給地であったと推定される。隠岐国に次いで海藻を記述した荷札木簡の多い志摩国は、海松(ミル属)や名乃利毛(ホンダワラ属)等、他の地域に記述のない種類を送っている。延喜式・巻卅二大膳上に、新嘗祭の臣以下五位已上の宮廷参加者には紫菜、海松各3分(約27.6g)、海藻11両(約440g)を支給、六位已下の者には海藻のみ11両(約440g)を支給するとあり(黒板 1986a,b,

1987), 今日でも伊勢神宮の新嘗祭に海松が使用されることから, 神事に使用されたものと推定される。

このように藤原京, 平城京, 長岡京の時代に造営された都の遺跡から出土した木簡を網羅的に調査した本研究から, 多様な海藻が北海道を除く日本列島の各地域から運ばれたことが初めて実証され, また, その一部は税としてあったことが確認された。すなわち, 飛鳥時代末期から奈良時代を中心として平安時代初期において, 海藻は, 律令制度の税の対象として経済的価値の定まった流通物資であったことを示唆する。

## 謝辞

本研究において, 東京大学大学院新領域創成科学研究科辻誠一郎教授にご指導いただきました。また, ご助言を賜りました兵庫県立人と自然の博物館館長岩槻邦男先生, 千葉県文書館岡野浩二研究員に謝意を表します。奈良文化財研究所には木簡史料の閲覧にご協力いただきました。本研究は千葉県立中央博物館分館・海の博物館おける海藻の民族植物学的研究プロジェクト・藻の文化の成果の一部であります。

## 引用文献

- 秋本吉郎 1998. 風土記の研究. 1085 pp. ミネルヴァ書房. 京都.  
 千葉県立中央博物館 (編) 1997. (七十一番職人歌合絵巻下巻. 16世紀初頭に制作) 職の風景—職人尽絵とその周辺—. 千葉県立中央博物館友の会. 千葉.  
 呉其潜 (撰) 清. 植物名實圖考長編二十二卷. 1962. 民國五十一年景印本. 世界書局. 台北.  
 塙保己一 (編) 1984 (明治時代復刻). 出雲国風土記. 続群書類従 33 輯上. 巻第九七一. pp. 425-459. 続群書類従完成会・平凡社. 東京.  
 神宮司庁 1911. 古事類苑. pp. 877-930. 東京築地活版製造所. 東京.  
 貝原益軒 1709-1715. 大和本草. 巻 8. pp. 309-40. 永田調兵衛. 皇都 (京都).  
 加納哲哉 2001. 微小動物遺存体の研究. 國學院大学大学院研究叢書. 文学研究科 7. pp. 121-180. 國學院大学.  
 加藤定彦 (編) 1978. 毛吹草. (松江重頼 1645) 299 pp. ゆまに書房. 東京.  
 加藤敏郎・水原秋櫻子・山本健吉 (監修) 1981. 日本大歳時記 冬. pp. 185, 273. 講談社. 東京.  
 経済雑誌社 (編) 1901. 続日本紀. 菅野真道等 (編). 国史大系第 2 巻. pp. 95. 経済雑誌社. 東京.  
 北村四郎 1973. 植物漢名と和名, 学名との同定. 國譯本草綱目 3. pp. 19-27. 春陽堂. 京都.  
 北村四郎・塚本洋太郎・木島正夫 1988. 本草図譜総合解説二. pp. 738-745, 750, 1207-1225. 同朋社出版. 京都.  
 鬼頭清明 2004. 木簡の社会史. pp. 117-190. 講談社. 東京.  
 国立歴史民俗博物館蔵史料編集会 (編) 1999. ⑤高松本. 倭名類聚抄. 高松宮旧蔵本・国立歴史民俗博物館蔵・江戸時代初期写. 国立歴史民俗博物館 蔵貴重典籍叢書. 文学篇第 22 巻. pp. 418-423. 臨川書店. 京都.  
 黒板勝美 (編) 1986a. 延喜式 後篇. pp. 759-942. 吉川文館. 東京.  
 黒板勝美 (編) 1986b. 交替式・弘仁式 延喜式 前篇. 国史大系. pp. 70, 104-106, 109-119, 150, 236-286. 吉川文館. 東京.  
 黒板勝美 (編) 1987. 延喜式 中篇. pp. 491-595, 599-600, 613-622, 658. 吉川文館. 東京.  
 黒住耐二 1999. 遺跡出土の貝類よりみた日本人の自然環境利用. 尾本恵市 (編) 平成 10 年度文部科学省研究補助特定領域研究「日本人および日本文化の期限に関する学際的研究」. pp. 43-44. 国際日本文化研究センター特定領

- 域研究「日本人・日本文化」事務局.  
 京都大学文学部国語学国文学研究室 1979. (昌住 892. 新撰字鏡) 天治本 新撰字鏡 増訂版. pp. 785-786. 臨川書店. 東京.  
 馬淵和夫 (編) 2008a. ①松井本. 静嘉堂文庫蔵・江戸初期写. ②前田本. 前田家尊経閣文庫蔵・明治時代写. 古写本和名類聚抄集成. 第二部十巻本系古写本の影印対照. pp. 215-217. 勉誠出版. 東京.  
 馬淵和夫 (編) 2008b. ③伊勢二十巻本. 神宮文庫蔵・室町時代初期写. ④天正本. 大東急記念文庫蔵・室町中期写. 古写本和名類聚抄集成. 第三部二十巻本系諸本の影印対照. pp. 582-587. 勉誠出版. 東京.  
 牧野富太郎 1936. コンブは海帯であって昆布ではない. 政界往来 7 月号別刷.  
 正宗敦夫 (編) 1977. 倭名類聚抄. 和名巻十七. 風間書房. 東京.  
 正宗敦夫 (編) 1988. 伊呂波字類抄. 七九, 五三ウ, 十, 九ウ, 三三ウ, 十三ウ, 三十三ウ, 四十ウ, 六ウ, 八, 廿一ウ, 四十四ウ, 五十, 二ウ, 三五. 風間書房. 東京.  
 俣野好治 2004. 「軍布」記載木簡について. 続日本紀研究 350: 1-16.  
 宮下章 2003. ものと人間の文化史 111・海苔. pp. 13-51. 法政大学出版局. 東京.  
 森勇一 1991. 珪藻分析によって得られた古代製塩についての一考察. 考古学雑誌第 76 (3): 62-75.  
 日本随筆大成編輯部 (編) 1995. (荻生徂徠 1736. 南留別志) 日本随筆大成第 2 期 15. pp. 1-50. 吉川弘文館. 東京.  
 大槻如電 (校) 1903. (新井白石 (編) 1717) 東雅. 20 巻目 1 巻. 15. pp. 391. 吉川半七. 東京.  
 澤瀉久孝 (編) 1943. 箋注倭名類聚抄. (狩谷掖斎 江戸時代後期). pp. 434-436. 全国書房. 大阪.  
 関根真隆 1969. 奈良朝食生活の研究. pp. 87-118. 吉川弘文館. 東京.  
 関根真隆 2001. 長屋王家目下にみる物名について. 奈良国立文化財研究所 (編) 長屋王家・二条大路木簡を読む. pp. 158-159. 吉川弘文館. 東京.  
 浙江省水産庁・上海自然博物館 (編) 1983. 浙江海藻原色図譜. pp. 119. 浙江科学技術出版社. 北京.  
 島田勇雄 (注) 1976. 本朝食鑑. (人見必大 1695) 東洋文庫 296. pp. 252-276, 282-288. 平凡社. 東京.  
 曾呈奎 (編) 2009. 中国黄渤海海藻. pp. 149-153, 201, 357-365. 科学出版. 北京.  
 上海科学技術出版社 (小学館) (編) 1985. 中葉大辞典第 2 巻. pp. 703-1405. 小学館. 東京.  
 朱楮 (撰) 明. 1959. 救荒本草二巻. 中國古代科技圖錄叢編初集之一. 用嘉靖四年刊本景印. 中華書局. 北京.  
 田口卯吉 (編) 1900. 令義解 833. 國史大系第 12 巻. pp. 106-107. 経済雑誌社. 東京.  
 田中静一・小島麗逸・太田泰弘 1997. 現存する最後の料理書齊民要術. pp. 340. 雄山閣. 東京.  
 谷川土清 1898. 倭訓栞下. pp. 209. 皇典講研究所印刷部. 東京.  
 館野和己 1998. 日本木簡の特殊性, 都城遺跡出土の木簡. 大庭脩 (編) 木簡 古代からのメッセージ. pp. 189-278. 大修館書店. 東京.  
 瀧川政次郎 1961. 海藻根考. 日本上古史研究 5.8: 141-145.  
 塚本哲三 (編) 1926. (宇津保物語 946 ~ 991 に成立). 宇津保物語上. pp. 256-257. 友朋堂書店. 東京.  
 与謝野寛 (編) 1926. (深根輔仁 918. 本草和名.) 日本古典全集第 1 回. 日本古典全集刊行会.  
 吉田忠生 1998. 新日本海藻誌. 1222pp. 内田老鶴圃. 東京.  
 吉田忠生・吉永一男 2010. 日本産海藻目録 (2010 年改訂版). 藻類 58: 69-122.  
 吉岡徳明 (編) 1886. 古事記傳 (本居宣長 (撰) 1798). 一之巻. pp. 9-17. 忠愛社. 東京.  
 渡辺晃宏 1991. 「二条大路木簡」にみえる諸国貢進物 二条大路木簡の内容 奈良国立文化財研究所 (編) 長屋王邸宅と木簡. pp. 131-137. 吉川弘文館. 東京.

(Received Dec. 7, 2010; Accepted Oct. 5, 2011)